

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2010

課題番号：19592557

研究課題名（和文） エコロジカル指向の当事者力量精神看護モデルの開発

研究課題名（英文） DEVELOPMENT OF AN ECOLOGICAL ORIENTED STRENGTH MODEL IN PSYCHIATRIC NURSING

研究代表者

氏名（ローマ字）：岩崎弥生（IWASAKI, YAYOI）

所属機関・部局・職：千葉大学

研究者番号：60232667

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学

キーワード：精神保健医療福祉、精神障害者、精神看護モデル、当事者力量

### 1. 研究計画の概要

本研究は、精神障害をもつ当事者の力量を高め、精神障害者を取り巻く環境に働きかけることができるようなエコロジカルな視点を取り入れた当事者力量精神看護モデルを開発し、看護アセスメントを始めとして、看護介入の指針や当事者のウェルビーイングに影響する尺度などの開発につなげることを目指している。ここで言うエコロジカルな視点とは、精神障害をもつ当事者を、当事者を取り巻く環境との関連の総体から捉えることを意味し、当事者の問題は文脈依存的であり、病院や地域、当事者の置かれた状況によって異なるといった前提をもつ。すなわち、エコロジカルな視点は、現象が生起する現場での研究を促し、直線的な因果関係では捉えきれない現象を、個人と物理的社会的環境の相互作用や相互依存といった相互関連性の網の目の中で捉えることを可能にするため、障害をもつ当事者を取り巻く現行の精神保健福祉資源や精神保健福祉活動や、障害者への見方を方向付ける社会文化的な価値観といった要因も追求できる。エコロジカルな視点はまた、個人のライフコースにおける役割や状況の変化も包含するため、個別で柔軟なケアにもつなげることができる。

### 2. 研究の進捗状況

(1) 平成 19 年度は、精神障害をもつ当人を対象としたインタビュー調査と、病院および地域において精神障害者のケアに携わる看護職者を対象としたケア場面の参加観察およびインタビュー調査を実施した。

精神障害者に対する調査では、療養生活および社会生活における当事者の力量を高める

要因を探った。当事者の能力を引き出す要因として、＜希望の実現＞＜人の役に立つ経験＞＜病気と向き合うこと＞＜自分自身もつ偏見からの開放＞＜自分への信頼の回復＞＜仕事・誇りの回復＞＜当事者同士の経験・対処の共有＞＜周囲からの信頼・支持＞＜地域の支援ネットワーク＞など、当事者・支援者・地域のレベルで要因が抽出された。

精神障害者のケアに従事する看護職者を対象とした調査では、当事者の力量を高める看護援助について検討した。当事者力量を発見しそれを育む看護として、＜非侵襲的なミクロ・マクロの観察＞＜本人のプロセスに応じた流動的な看護判断・戦略＞＜本人の強み・生命力の発見に基づくアプローチ＞＜本人の意思・経験の尊重＞＜本人との協働＞＜支援チームの中で役割の分担・拡張＞＜本人の周囲の人々の安定化＞などが抽出された。特に、本人の周囲の人々の安定化は、当事者力量の回復に大きくかかわる地域生活と社会参加を実現・維持する上で欠かせないものであることが示唆された。

(2) 平成 20 年度は、当事者の力量に影響を与える社会文化的な要因を探り、前年度の成果と併せ、当事者の力量を高める精神看護の実践・研究モデルを検討した。

当事者力量に影響する社会文化的な要因については、病院—地域を包括した精神障害者支援ネットワークを確立している地域における支援について、精神障害者の地域生活支援や社会参加との関連から、地域ぐるみの支援ネットワークの構築に至るまでの経緯、ネットワーク化を進めていく上での生じた問題や意見対立及びそれらへの対応、ネットワーク

の構造、ネットワーク内外での連携及び合意形成の方法、ネットワークに対する当事者・住民・保健医療従事者の価値づけなどを分析した。また、当事者力量精神看護モデルの構成概念については、英国において精神看護モデルの開発過程およびモデルの実践への適用の実際についての聞き取り・観察結果に基づき、当事者力量の視点からモデルに含まれる概念を検討した。

当事者力量を構成する下位概念として、希望・目標、病気管理、自助と求助、生活経験の蓄積が抽出された。

当事者を取り巻く環境には、家族や職場・学校、保健医療福祉サービス、地域社会などがあり、当事者力量に影響する社会文化的要因を束ねる概念として、①当事者の参加（当事者の存在肯定、当事者への信頼、病気体験の再(生)利用、役割の場、地域活動への参加）、②重層的で柔軟なネットワーク（保健福祉ネットワーク、仲間とのつながり、普通をつながり）、③顔の見える多様な存在の仕方ができる共同体（排除の縮小、出会いの保障、挑戦の機会）が抽出された。これらの社会文化要因のありようが、当事者の経験や生活を豊かにしたり、あるいはその反対に生活の質を奪ったり脅かしたりすると考えられた。

(3) 平成 21 年度は、当事者力量評価質問紙及び当事者力量を高める看護援助に関する質問紙を作成し、質問紙の信頼性を検討するとともに、当事者力量について、当事者力量を高める看護援助の実施状況や当事者の属性などとの関連から調査した。

質問紙の作成においては、まず平成 19 年度の研究成果及び文献をもとに、当事者力量評価及び当事者力量を高める看護援助に関する質問紙の項目を吟味した。次に、質問項目の内容妥当性について専門家及び当事者から意見を聴取し、質問紙を修正した。

調査対象者は県中央部と南部の精神科病院 2 ヶ所及び総合病院精神科病棟 1 ヶ所に勤務する看護師 270 名である。調査方法には郵送留置法を用いた。計 193 名（回収率 71.5%）から回答を得て、有効回答 187 名分を分析した。質問紙の信頼性の検討には Cronbach の  $\alpha$  係数を算出した。構成概念妥当性の検討には因子分析を行なった。

Cronbach の  $\alpha$  係数は、当事者力量評価質問紙 0.84、看護援助質問紙 0.89 であり、両質問紙ともに内的整合性があることが確認された。因子分析（重み付けのない最小二乗法、プロマックス回転）の結果、当事者力量評価質問紙 4 因子（病気管理、充実生活、求援、生活目標）、看護援助質問紙 4 因子（対処力強化、肯定、尊敬、受容）が抽出された。これらの因子は、前年度までの帰納的な分析結果とある程度整合しており、一定の妥当性が

示唆された。

3. 現在までの達成度
- ②おおむね順調に進展している。

(理由)

当初の計画どおりに研究を実施し、それぞれ年度ごとに研究計画にそってデータ収集・分析を行ない、研究目標（平成 19～21 年度：当事者力量精神看護モデルの検討）を達成してきた。

ただし、研究成果の発表という点では、より一層の努力が必要である。

4. 今後の研究の推進方策

最終年度となる次年度は、当事者力量研究協力の承諾の得られた精神科病棟の協力を得て、看護職者に当事者力量を高める看護援助を提供してもらい、援助過程及び援助結果を評価し、当事者力量モデルの有用性を検討する予定である。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1 件)

- ①石川かおり, 岩崎弥生. 統合失調症をもつ人の地域生活におけるセルフマネジメントを支える看護援助の開発—仮説モデルを用いた看護実践の分析. 千看会誌, 14(1), 34-43, 2008. 査読有り

[学会発表] (計 4 件)

- ①小宮浩美, 岩崎弥生, 石川かおり, 東本裕美, 山田洋. 当事者力量を高める看護援助—看護師に対する観察・聞き取り調査より. 日本精神衛生学会第 24 回大会抄録集, 26, 2008.
- ②Nosaki, A., Iwasaki, Y., Ishikawa, K., Higashimoto, H., & Komiya, H. Practical knowledge of psychiatric nurses: "Knacks" of psychiatric nursing practice. The RCN 12th European Mental Health Nursing Conference and Exhibition Programme, 61-62, 2008.
- ③Komiya, H., Iwasaki, Y., Higashimoto, H., & Ishikawa, K. Effects of strength-based discharge nursing support for long-stay patients with mental illness. International Nursing Conference, Seoul, 2009.
- ④Komiya, H., Iwasaki, Y., Higashimoto, H., & Ishikawa, K. Strength-oriented community psychiatric nursing -- Qualitative analysis of participant observation. Shanghai International Nursing Conference, 184, 2009.